

図書館だより



2017年（平成29年）
12月19日 ・ 火曜日

第 8 号

北海道旭川永嶺高等学校
図 書 局

今年度、第六回井上靖記念館エッセイコンクールにおいて、本校1年6組の福田大貴君が、みごと「ナナカマドの会賞」を受賞しました。素晴らしい作品ですので、全文を掲載します。みなさんもぜひお読みください。

境界線の向こう側にいる僕へ

「いつからこんな声になったのだろう。」中三の夏頃から僕はよくこう思うようになった。

少し前までは懂れていた低い声も、今となっては全く逆の感情を抱く。あの頃に戻りたい。何もかもが楽しかったあの頃に。

「耳、わるいんじゃない？」僕が父に向けて放った言葉。もうすぐ五十半ばになる父の耳が遠くなっていることも考えられるが、そうではないだろう。ただでさえ低い声を僕がボソボソと、まるで言葉の一つひとつを目の前に落とすかのように使ってしまったからだ。僕が何か話すたびに「何だって、聞こえない。」と訊き返してくる酔っ払ったオジサンに怒りがこみ上げてきたので会話は途中であったが、二階の自分の部屋に走った。

最近はここが一番安心する。誰と話すこともなく、誰にも勉強の邪魔をされない。最高の場所だ。感情的になった心を落ちつかせ、ふと気づいたことがあった。

「あれ、昨日もお父さんにキレたな。」高校生になってからこんなことが多くなった気がする。それもそのはず、新生活を送るようになって心の底から楽しいと思えることがなくなってしまったのだから。

「ただいま！」中学校から帰ってきてまず笑顔でこう叫ぶ。すると家の中にいた母が、「おかえり。」と返してくれる。

これが日常だった。あの頃は毎日通る通学路にきらび

やかな色がついていた。いつでも周りには、いつものメンバー・通称「イツメン」がいた。バカなことしかしていなかったが、素直に楽しいと思えた。幸せだった。

だがその幸せが続いたのもたった三年。彼らはそれぞれ、自らの道を歩み始める。もちろん僕自身もだ。

そして僕の選んだ道と同じ道を歩もうとするイツメンは選んだ道と同じ道を歩もうとするイツメンは誰一人としていなかった。仕方のないことだが、実際かなりさびしい。

もうこのメンバーでバカできないのか。卒業式の日とにかく涙が止まらなかった。

学年全体で泣きながら笑ったこの日を境に僕の孤独な日々幕が上がった。

「はじめまして。よろしくお願いします。」さびしさと若干の期待を胸にクラスでの自己紹介を終えた。はっきりとした、大きな声で。

しばらくして、いくつかの行事があり、それらを通して友達が何人かできた。中学と同じように自分のキャラもしっかり出せた。

でも何だろう。違和感がある。

ある日友達と話している時、そいつの正体を見破った。笑顔だ。一度の会話に一体いくつの愛想笑いが顔をのぞかせたのだろうか。本気で笑うことができていないこの状況を果たして「友達」との会話とっていいのか。

「一緒に部活行こ！」ただ相手の機嫌を取ることでだけ気にしていた僕に彼は優しく言う。小学校から同じだった彼とは、まあまあ仲が良かったのだが、中学で一度も同じクラスになれず話す機会が減り、なんだか気まずかった。しかし彼は明るく声をかけてくれた。違うクラスなのに、教室で掃除している僕にわざわざ会いに来てくれた。変に気まずく思っていたのは自分だけだったのか

もしれない。

「おつかれさまでした。」先輩へ向ける笑顔はまだ引きつっているかもしれない。でも自転車に乗って一緒に帰っている彼には自分なりの最高の顔を見せられている、と思うことができた。

孤独という何もない闇の中、差し込んだ一筋の光。それは僕の足下を照らし、あの頃のような明るい地上へと導いてくれた。

「おはよう！今日もギリギリだわ。」時計の針は遅刻二分前。階段を急いで駆け上がったため、荒い息をしながら隣の席の人といつも通りの挨拶を交わす。するとすぐに、教室に担任の先生が入ってきて、いつも通り朝のHRが始まる。と、ここまでは以前と大差はない。違うのはHRが終わってからだ。

授業前の十分休みに入ると僕は動き出す。愛想笑いなく話し合えるようになった、本当の「友達」のもとへ。

濁りのないきれいな笑顔は不思議なもので周りの人さえも笑顔にしてみよう。そんな武器を僕は優しいあの人から、勇気と一緒にもらった。

それを駆使してできたたくさんの友達と話すときの僕は、無意識のうちに、自分の意志を「言う」声ではなく、「届ける」声を使うようになっていた。もう言葉を目の前に落としたりなんてしない。だって言葉たちもかわいそうでしょ、そんなの。どうせならこの道、楽しく歩きたいじゃん。過ぎた場所にはもう戻れない。けど楽しい場所は他にもある。あとは自分でその場所を探すかどうかだ。

「ただいま！」帰宅した僕をみて母は「おかえり。」という。久しぶりの光景だ。そのすぐ後に家の中から、酒に酔ってご機嫌な声で「おかえり。」と聞こえた。

やっと届いたよ。僕もご機嫌だ。